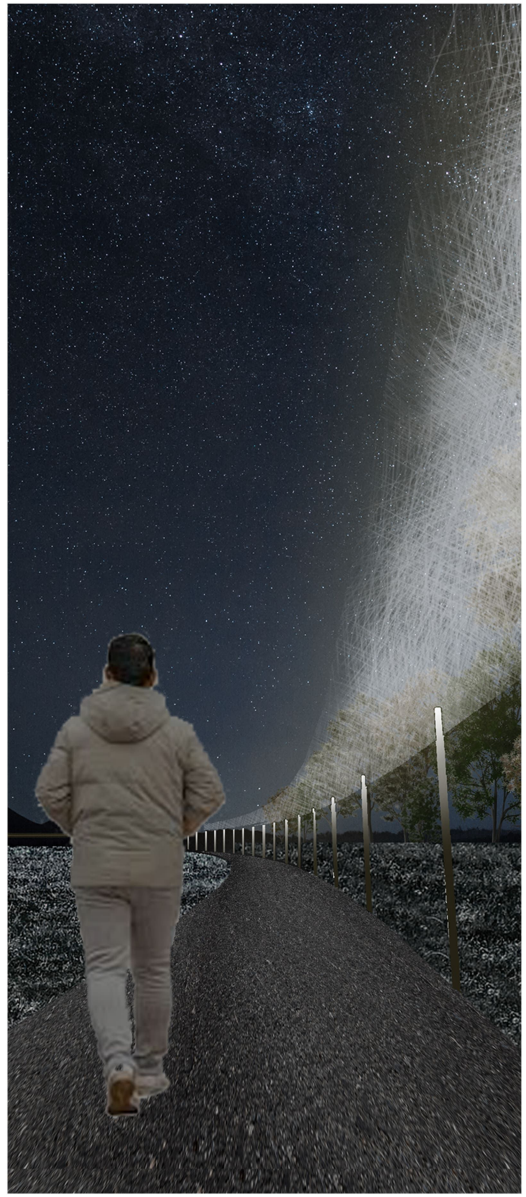
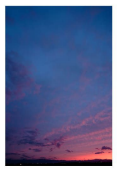


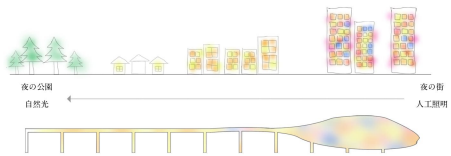
雲、映る鼓動



総合公園や運動公園に分類される規模の大きな都市公園の夜間利用。
日中に比べ、夜間の利用者は激減する。街灯は設置されているけども、
近づくと眩しくて、遠ざかると真下だけを照らして不気味でもある。
夜の公園は、街から、人々の暮らしから切り離される。

夕暮れ時、あたりはすっかり暗くても、遠く向こうの山やビルの上空にはまだ、
赤やピンクに染まった雲を見つけることがある。
そんな雲を見ていると、なんだかほっこりするような安心するような気持ちになる。
遠くに住む家族や、友人たちの顔が頭に浮かんで、無意識に積もった不安や緊張がほどける気がする。
そんな、遠くにいる誰かの存在を映すようなガラスの雲を、夜の公園に浮かせてみる。

この雲は、綿飴のように細い無数のグラスファイバーが、柔らかく絡まりながら形成されている。
繁華街、オフィス街、住宅街等、街の各所に設置され、
公園まで途切れることなくつながっている。看板の電飾、信号機、建物内部から漏れる光は、
この雲に吸い込まれ、数えきれないほどの反射を繰り返しながら、公園にたどり着く。



街で利用されている様々な種類の人工的な光が雲の中で織り交ざり、
いくつもの光の波長が重なることで、親しみのある自然で柔らかな光が紡がれる。

街での、電飾の色が変わり、信号が点灯し、車のライトが当たって、側を歩く人々が
この雲に影を落とす度、これらの街の活気と人々の往来が、公園での雲にぼわぼわと、
とてもかすかな発光の変化を与える。

ベンチや屋根に姿を変えながら浮かぶこの雲に、足元を照らす程の光はないが、
その中に映し出される絶え間ない街の鼓動に、夜の公園は満たされ、利用者は包まれていく。